

【論文】

## メタ倫理におけるパトナムの立場

大谷 弘

### 0. 始めに

本稿はヒラリー・パトナムの哲学的立場がメタ倫理上において占める位置を検討する。パトナムは、1970年代末にいわゆる内在的实在論の立場に転向して以来、倫理学上の問題についても様々に発言しており、それらの発言の中にはメタ倫理の領域に属すると通常考えられるものも多い。だが、パトナムの立場はメタ倫理学者たちの間ではほとんど無視されているというのが現状である。実際、パトナムの主張を主題的に取り扱ったメタ倫理上の論文や著作というものは、いくつかの例外を除いて、ほとんど見当たらない。

この「無視」の理由としては、パトナムの立場が非常に頻繁に変更されるので、一つの立場として定式化しにくいというのが考えられるかもしれない。確かに、パトナムは言語哲学、心の哲学、科学哲学などに関して自身の立場を頻繁に変化させている。だが、倫理学上の立場に関しては、少なくとも内在的实在論を採るようになった1970年代末以降は基本的に一貫している。従って、「立場の変更」ということにより無視を説明することはできない。おそらく、無視の本当の理由は、パトナムの倫理学上の立場が彼の言語哲学、心の哲学、科学哲学などにまたがる彼の全体の立場、すなわち内在的实在論と密接に関連しており、パトナムについて論じると議論をメタ倫理上の問題に絞ることができなくなるということであろう。これは現代の専門化したメタ倫理学者にとっては問題であるかもしれないが、逆に言うと、専門化の弊害を打ち破って、メタ倫理の議論を他の様々な領域と関連させる手がかりとしてパトナムの立場を利用できるということでもある。本稿では、1970年代末以降のパトナムの内在的实在論を主な検討対象とし、彼の立場がメタ倫理上でどのように位置付けられるのかということを明らかにすることを目指す<sup>(1)</sup>。

パトナムの立場が無視されてきたということにより、本稿の第一の課題は

彼の立場を説明するということにならざるを得ない。従って、本稿では彼の細かな議論を批判、吟味するというよりは、彼の主張が形成されたコンテキストに注目し、大まかな見取り図を描こうと思う。

## 1. メタ倫理の出発点

まず、メタ倫理の出発点がどのようなものであるかということについてごく簡単に見ておこう。メタ倫理において問題となることの一つは道徳を科学との関係においてどのように位置付けるかである。近代以降、科学はその大きな成功によりある種の至高性を獲得してきた。今日、我々は科学的な世界観が優先されると基本的には考えており、この世界観に反するような主張は問題視される。メタ倫理の出発点とされる『倫理学原理』において、ムーアは善さのような道徳的性質が自然科学とはまったく異なる領域に属すると論じたが、ムーア以降のメタ倫理学者の多くは自然科学とまったく異なる領域を否定する方向で議論を展開したのである。

ムーアはそれ自体としての善さという性質は自然科学の対象となるような性質ではなく、それ自身特別な地位を持つ性質であると考えた。

私が「善い (good) とは何か」と問われるならば、私の答えは、善いは善いである、でありそれで終わりである。あるいは、私が「いかにして善いは定義されるべきなのか？」と問われるならば、私の答えは、善いは定義できないというものであり、私がこれについて言うべきことはそれだけである。(Moore (1903): 6)

ムーアは「善い」を定義しようとするあらゆる試みを「自然主義的誤謬」と呼び批判する (Moore (1903): 10)。ムーアによると「善い」という観念を「善いもの」の一つに過ぎない例えば「快」のような観念と混同してはならないのである。「善い」の定義に反対するムーアの議論はいわゆる「未決問題論法」である。『倫理学原理』のムーア自身の議論は錯綜していてわかりにくいですが、整理すると次のようになる。すなわち、ムーアによると、我々は同義な概念が同義であるということを常に知っており、「善い」が「快い」

のような語と同義であるとする、我々はトリヴィアルな仕方でその同義性を認識できるはずである。ところが、「快いこのものは善いのだろうか?」ということは常に議論の余地のある問いであり、トリヴィアルな仕方でその同義性が認識されることはない。従って、「善い」が他の述語により定義されることはありえない。

ムーアは「善い」を定義しようとする試みを「自然主義的誤謬」と呼んでいるが、この議論の批判対象は自然的な述語により「善い」を定義しようとする試みに制限されているわけではない。例えば、「善い」を何らかの形而上学的な述語により定義しようとする試みに対しても上記の議論は同等に適用されうるものであり、形而上学的定義も同様に自然主義的誤謬を犯していると考えられるのである<sup>(2)</sup>。

ムーア自身はこのような議論から「善い」はそれ自体で成立する非自然的性質であるとしたが、多くの哲学者にはそのような性質を認めることは形而上学的にも認識論的にも困難が大きいと思われた。実際、ムーア以後のメタ倫理学者たちは、そのような非自然的性質を認めることを拒む方向で議論を進める。一つの有力な立場は論理実証主義者たちにより採用された情緒説(emotivism)である。彼らはムーアに従い、「善い」が自然主義的にも、形而上学的にも定義されえないということを認める。だが、ムーアの言うような非自然的性質は経験により検証可能なものではなく、従って論理実証主義者の基準からすると、まがいものの観念である。「善い」が定義できないのはそれがそれ自体で成立する性質を表すからではなく、実在する性質をそもそも表現してはいないからなのである。ここから、彼らは、「善い」という語が現れる文は真理値を欠くものであり、事実的内容を表すものではないと論じる。そのような文はむしろ、欲求を表現したり、聞き手の感情を喚起したりするという効果を持つものであって、事実の記述を目指しているようなものではないのである。このような情緒説の見解は通常イギリスの論理実証主義者であるエアにより代表されるが、ここではパトナムとの関係でカルナップを引いておきたい。カルナップは、何らかの目的を達成するのにある行為がよい(good)ということ述べる相対的、もしくは条件付き価値言明を何らかの行為がそれ自体として道徳的に善い(good)と述べるような絶対的、もしくは無条件的価値言明から区別する。そして、その上で次のように述

べる。

他方、何かなされるべきかについてのみ述べる絶対的価値言明は経験主義者の有意味性の基準によると、認知的意味を欠いている。それらは、確かに非認知的な意味の要素、とりわけ情緒的なものや動機付けとなるようなものを所有しており、教育や訓戒や政治的アピール、等々におけるそれらの言明の効果はこれらの要素に基づいている。しかし、それらの要素は認知的ではないので、このような絶対的価値言明を主張として解釈することはできないのである (Carnap (1963): 81)。

このようにメタ倫理の出発点においては「善い」のような道徳的述語が実在的な性質を表すと考えるムーアのような立場と、「善い」はそもそも実在的な性質を表すものではなく、我々の欲求の表明としてのみ成立すると考える論理実証主義者たちの立場とが展開された。現代では道徳的述語が実在的な性質を表すと考える論者も、そのことを否定する論者もより洗練された議論を展開し、また、道徳的述語が自然的な実在的な性質を表すと考える論者も登場するなど、メタ倫理を巡る状況はより複雑になっているが、ここではメタ倫理の出発点の状況を確認した上で、本題であるパトナムの立場を検討してみたい。

## 2. 内在的实在論の構造

パトナムは 1970 年代末以降、「内在的实在論」と呼ばれる立場を採り、科学主義的な实在論である形而上学的实在論や相対主義を批判している。多くの哲学者はパトナムの立場が精確にどのようなものであるのかは明らかではないと文句を言うが、内在的实在論がどのような立場であるのかということは、パトナムがそのキャリアのはじめから一貫して行っている論理実証主義に対する批判を軸にして整理することで理解しやすくなると思われる。

パトナムが主に批判対象とする論理実証主義者はカルナップやライヘンバッハである。ここでは、カルナップを取り上げパトナムとの関係を問題にしてみたい。時々誤解されているが、カルナップの哲学的目的はすべての知識

を経験から正当化するという基礎付け主義的なものではない。すなわち、経験によって正当化されないという理由で道徳的言明は拒否されるのではない。言語的枠組みから独立に正当化について語ることはカルナップにとって意味を持たない<sup>(3)</sup>。カルナップの考える哲学者の仕事は言語的枠組みの明確化である。カルナップによれば、哲学や科学における多くの論争においては、精確な定式化が欠けているために論争や探求のための枠組みが共有されておらず、そのために不毛な論争が行われることになってしまっている (Carnap (1963): 44-45)。従って、哲学者の仕事は科学者が漠然と使用している枠組みを形式化し整備することにあるのである。フレーゲ以来の記号論理学の発展に大きな感銘を受けていたカルナップは、形式言語という形で科学者の枠組みとなっている言語を整備すれば不毛な論争や形而上学を追放できると考えた。すなわち、科学者の用いる枠組みとして帰納的および演繹的な論理的帰結関係と意味論的規則その他を整備することがカルナップにとっては哲学者の課題なのである。彼にとって、科学の言語とは何らかの形で経験と連関をしているものであり、有名な検証原理は哲学者が整備する言語のあり方についての制約として提案される。カルナップ自身は言語の選択に関しては自由度を認めており、どのような言語を構成するかについては寛容でなければならないとされる。彼は共有された枠組みの中での問いとしての内部問題と、枠組み自体のあり方について問う外部問題を区別する。カルナップによると内部問題に対してはその枠組みを参照して答えればよいが、外部問題はプラグマティックな意思決定の問題であり真偽が問われるようなものではなく、寛容さが認められねばならないのである (Carnap (1950): 214)。

カルナップにとっては経験と結びついた、まともな知識の体系である科学の言語的枠組みの整備が哲学者の課題である。ここでの問題にとって重要なのは、この枠組みとしての言語には帰納的、および演繹的な論理的帰結関係が含まれているということである。これはすなわち、経験から何を導くかという帰結関係を形式化するということである。普段、通常の科学者は非形式的で直観的な仕方を経験から理論を構成し、また判断を下している。これを形式化できると考えるとは、つまり科学的合理性を形式化できると考えることである。すなわち、カルナップは合理性を完全に形式化することで、あらゆる問題に対して枠組みを参照することでほとんど自動的に答えることがで

き、不毛な論争が存在しなくなることを理想として目指したのである。

このようなカルナップの立場に対してクワインが「経験主義の二つのドグマ」において批判を行ったのは有名である<sup>(4)</sup>。この論文の特に後半部で、クワインは個別の文に対してその検証に関わる経験の領域を確定することができると思うのは誤りであると論じる。クワインによると、理論の検証は全体論的になされねばならず、枠組みに属すると考えられる文であつても経験に基づき改訂される可能性がある。従つて、どのような枠組みを受け入れるのかということと、枠組みを参照した検証とを明確に区別することはできないのである。

パトナムはこのクワインの主張を全面的に受け入れるわけではないが、そこから非常に大きな影響を受け、論理実証主義に対する批判を展開している。パトナムにとつても、カルナップ流の枠組みの内と外、内部問題と外部問題という区別は受け入れられるものではなく、科学者の言語の明確化としての哲学というカルナップのプログラムは根本的に見直されねばならない。パトナムのカルナップに対する代表的な批判はカルナップの帰納論理に対するものである<sup>(5)</sup>。先にも述べたように、カルナップは帰納が論理的関係として枠組みの中に組み込まれると考えた。すなわち、科学的合理性の重要な部分である帰納の関係は論理的帰結関係として形式化されると考えたのである。これに対して、パトナムはゲーデルの不完全性定理を応用し、帰納関係を論理として完全に形式化することはできないということを数学的に示した。いま袋からボールを取り出す試行を繰り返し、そこからの帰納により次に現れるボールの色を予測するというような簡単な帰納を扱う帰納論理を考えたとしよう。パトナムの示した定理によると、どのような仕方でも帰納論理を定式化したとしても、それにより予測不可能な規則性が存在してしまう。そして、この新しい規則性を予測する帰納論理は常に新しく作ることができるので、結果的に、どのような帰納論理の体系に対しても、それが予測することはすべて予測し、かつそれが予測できないことをも予測できるより優れた別の帰納論理の体系を構築することができるのである。

このように、パトナムの示した結果によると帰納的な合理性を論理として完全に形式化することはできない。従つて、経験的入力および合理性を形式化したものである言語的枠組みに照らしての客観的判断という論理実証主義

者による客観的真理の説明は受け入れられない。では、客観的真理というものをどのように考えるべきなのだろうか。内在的实在論を採って以降のパトナムは形而上学的实在論と相対主義という二つのオプションを検討し、両者を退ける。

形而上学的实在論とは、パトナムの特徴付けによると、(1) 世界は心から独立の対象〔と性質〕の固定された全体からなる、(2) その世界のあり方についての真で完全な記述がただひとつ存在する、(3) 真理はある種の対応を含む、という三つの主張を受け入れる立場である (Putnam (1990) a: 30 ff. )。パトナムが考える形而上学的实在論は、科学主義的、唯物論的な形而上学的实在論である<sup>(6)</sup>。そのことを踏まえて、この形而上学的实在論の三つの主張を検討すると、形而上学的实在論の基本的なアイデアとは、我々から独立で認識超越的な世界が存在し、科学理論の真理性はこの世界とのこれまた認識超越的な「対応」関係により保証されるというものであろう。すなわち、我々は科学理論が客観的に真であると考えているが、その客観性は我々と独立の世界との対応関係が存在することに存していると形而上学的实在論者は考えるのである。

さて、パトナムは形而上学的实在論にどのような批判を向けるのであろうか？一言で言うと、パトナムの批判は、「我々から独立の認識超越的な対応関係」という観念は意味を成さないというものである。

少しでも心理学的に洗練された考えを持つ人にとっては、「対応」という観念は困難を含むということはバークリやカントの頃から指摘されてきた。心理学的に洗練されていない人にとっては、いかにして我々が「語を対象と対応関係に置く」のかを述べることは簡単に思える。子どもに例えば「テーブル」のような語を教えるためには、我々はその子に対象を見せ、その対象（あるいは、むしろその種の対象）の前で様々な仕方で語を使用し、その子に語を対象と「連合 (associate)」させればよい。ある意味ではこれは疑いもなく正しい。(中略)

しかし、心理学は近代哲学と同時期に登場した。初期の哲学的心理学者 ----- 例えばヒューム ----- は我々は文字通りに対象を心の中に持つのではないと指摘した。心は決してイメージや語を対象と比較すること

はなく、単に他のイメージや語や信念や判断、等々と比較するだけなのである。語や心的表象を対象と比較するという考えは無意味である。では、いかにして語や心的表象と外的対象の間の一つの確定的な対応がそもそも取り出されうるのだろうか？いかにして対応は固定され则认为られるのだろうか？ ( Putnam (1983): viii, [ 強調は原著者による ] )

パトナムは様々な仕方で「我々から独立の認識超越的な対応関係」という観念に攻撃を加えるが<sup>(7)</sup>、その中心的なポイントは言語や心的表象はそれだけではまだ単なる項であり、どのような仕方で世界と対応させることができるというものである。すなわち、それらの間の対応関係は無数に存在し得るので、理論と世界の間我々から独立の対応関係という観念は維持できないとパトナムは考える。彼によると、形而上学的實在論は科学理論の客観性の源を我々から独立の世界との対応関係に求めるが、残念ながら、完全に我々から独立の対応関係というものを考えることができないのである。

形而上学的實在論を拒否したパトナムは、しかし、全面的な相対主義を採り客観性を放棄することはできないと考える。パトナムの相対主義への批判はそれが自己論駁的だということである。例えば、パトナムは「共約不可能性」のテーゼを検討する。「共約不可能性」テーゼによると、異なる文化（パラダイム）に属する概念枠は違う意味を持ち、従って、理解不可能であるとなる。しかし、これに対してパトナムはクワインやディヴィッドソンの議論を援用して、そもそも翻訳が不可能な言語や概念枠を言語や概念枠であると考えることができないと論じる。すなわち、我々に理解できないような言語はそもそもただのノイズと変わりがなく、「有機体が発するノイズをまったく解釈できないとしたら、それらの有機体を思考者、話者、あるいは人間とみなす根拠はない ( Putnam (1981): 114, [ 強調は原著者による ] )」のである。

パトナムは以上のようにカルナップ流の形式的枠組みに基づいて客観的真理を確定する試みも、客観的真理を形而上学的實在論的な仕方で確保することにも、また真理に対して相対主義的な観点を採ることにも反対する。内在的實在論以前のパトナムはカルナップのようなやり方では客観的真理を確定できないと考え、形而上学的實在論の立場を採っていた。この時点で、カル



ナップに対する批判からパトナムの引き出した結論は、真理は我々の言語的枠組みに依存するものではなく我々から完全に独立に確保されねばならないというものであった。しかし、形而上学的実在論もまた維持し得ないとパトナムは考えるようになる。すなわち、我々から完全に独立の客観的真理という観念は理解できるものではないとパトナムは考える。ここで、残された選択肢は、客観的真理が我々に何らかの仕方で依存していると考えるか、客観的真理という観念を放棄し相対主義を採るかである。パトナムにとって相対主義は受け入れられるものではない。そこで、パトナムは客観的真理が我々に依存しているということを認めることになる。ここにおいて、パトナムがカルナップに対する批判から引き出す結論は、客観的真理が我々に依存する仕方を形式的な枠組みとして表現することはできないというものになる。すなわち、我々は非形式的ではあるけれども客観的な合理的判断能力を持つと内在的実在論者のパトナムは考えるようになるのである。我々は自身の合理的判断能力に基づき何が真理であるかを判断している。これは絶対的ではなく、可謬的ではあるが十分に客観的な能力であると内在的実在論者は考えるのである。

### 3. メタ倫理におけるパトナムの立場

以上のような内在的実在論の枠組みから、パトナムは伝統的になされてきた事実/価値の二分法を否定し、事実と価値はもたれあっていると考えねばならないと論じる。我々は我々の合理的な判断能力に基づいて事実判断を行わねばならない。この合理的判断は論理として形式化できるようなものではなく、価値依存的なものである。だが、価値に依存しているとしても、この合理的判断能力に基づく事実判断は客観的なものであると考えられねばならないというのである。

事実/価値二分法を拒否するパトナムの議論の一つは、科学も価値を前提としているというものである (Putnam (1982))。道徳的判断や、美的判断のような価値判断はあいまいで精確な定式化をすることは不可能である。そのため、これらの判断についての人々の意見は一致をみない。従って、価値判断は主観的であると事実/価値二分法の支持者は言う。だが、科学的事実の判定

に際しても、我々は既に存在している形式的な枠組みに照らしアルゴリズム的な仕方では判断を下していると考えすることはできないというのがパトナムの論理実証主義批判の要旨であった。実際の科学者が現場で下している判断は、理論の単純性、整合性、包括性など非形式的で価値判断的なものであり、科学的事実の判定もこのような価値に依存しているのである。もし、価値に依存しているという理由で、道徳的判断や、美的判断が拒否されねばならないのだとしたら、科学的判断も同罪であり、我々は全面的な相対主義に陥ることになる。だが、そのような道を探ることはできないと考えられるのであった。

このパトナムの議論に対して、単純性や整合性などの価値判断は理論の真理についての判断ではなく、我々がその理論を受け入れるかどうかについて正当化を持つかどうかの判断でしかないと反論されるかもしれない。結局のところ、それらは「認識的価値」であって理論が実際に真理であるかどうかには関係しないというのである。

だが、認識的価値は真理とは無関係であるという主張はまさに形而上学的実在論の主張である。真理は認識超越的な理論と世界の対応関係に存するのであり、我々の認識的なあり方とはまったく独立であるという真理観は不適切であるということは、パトナムが形而上学的実在論を批判するさいのポイントであり、形而上学的実在論の拒否を受け入れるならば、科学的判断が価値依存的でありながらも、客観的であると認めることへとつながるのである。

パトナムが事実/価値二分法を拒否するとき念頭においているのはいつも道徳的価値というわけではないが、いったん事実を科学的事実と同一視することを拒み、これに含まれないものは主観的価値であるという考えを拒否すれば、道徳についてもそれが価値判断的要素を含みながらも、真正の事実判断でもありうるということを認めることができるようになる。そして、実際にパトナムは道徳的判断が客観的でありうることを主張する。もちろん、このように主張することは道徳についての科学が存在すると主張することではない。そうではなく、パトナムによると、道徳的判断は科学的判断とは別種のものであるが、それでも十分に客観的な事実判断であり、我々は道徳的真理や道徳的事実を客観的なものとして認めることができるのである。言い換えれば、道徳的実在論は形而上学的実在論ではなく、内在的実在論でよいのである<sup>(8)</sup>。

このようなパトナムの主張は、論理実証主義者流の情緒主義には直接的な批判になる。先に見たように、カルナップは事実の領域を経験の入力およびこの入力と結びついた枠組み参照的判断という仕方で区切ることができると考えた。そして、その上で道徳的判断はこの事実の領域に属する真正の判断ではなく、価値の領域に属するものであるとした。彼らにとっては道徳的判断は感情や欲求を表すものに過ぎず、真理値を欠くのである。だが、パトナムはそもそも、事実と価値という区別を引くことはできず、道徳的判断が価値依存的であるからといって真正の事実判断ではないと考えることはできないと論じたのである。

問題は、このようなパトナムの立場が現代のメタ倫理学者の議論とどのような仕方で関連しているのかわかりにくいということである。現代のメタ倫理学者で論理実証主義者の意味論を共有しているものはおらず、また、自然主義的な立場を採る論者の中にも道徳的事実が真正の事実であることを認めるものも多い。現代のメタ倫理学者の全員の立場をサーベイすることは本稿の課題ではないので、ここでは道徳が広い意味での我々の感情や態度の反映である点で、エアやカルナップの立場を受け継ぎながら、それを更に洗練させ発展させているサイモン・ブラックバーンとパトナムの立場の関係を考えてみたい。

ブラックバーンは道徳的言明が事実を表象する信念を表すものではなく、広い意味での我々の態度を表現するものであると考える。具体的にはブラックバーンは投射主義を採る。すなわち、「浮気は悪い」と我々が判断するとき、浮気という世界の中の出来事が「悪い」という性質を持っているかのように我々には感じられるが、これは実際に世界の中に「悪い」という性質が存在するのではなく、我々の態度、我々がその種の出来事に対して反応する仕方が世界に投射されているのだと考えるのである。彼によると、道徳的事実や真理は世界の側に根拠を持つものではなく、我々は道徳に対して反実在論を採らねばならない<sup>(9)</sup>。ブラックバーンは投射主義をヒュームに帰し、次のように言う。

道徳的存在者としての我々の本性は、価値や義務や権利、等々のようなものは何も含まない実在に対して我々が反応していると考えらることで

非常にうまく説明されうると投射主義者は主張する。实在論者は道徳的存在者としての我々の本性は、独立した道徳的实在を我々が知覚、認知、直観することができると思ふことで非常にうまく説明されると考える。实在論者が物事の道徳的特徴は我々の感受性 (sentiment) の親であると主張するのに対して、ヒューム主義者はそれらが我々の感受性の子どもであるとするのである (Blackburn (1981): 164-165)。

ブラックバーンの立場は、我々の「態度の改良」という仕方で道徳的真理や事実といった観念を實在にコミットすることなく回復できると考え、また実際にその道筋をある程度示しているという点でかつての論理実証主義者の情緒主義よりも洗練されている<sup>(10)</sup>。だが、ブラックバーンは投射主義を採り、道徳的判断は我々の態度の表明であり、道徳的判断に関わる心的状態は信念のような認知的 (cognate) なものではなく、欲求や感情のような動能的 (conate) なものであると考える点で論理実証主義者の立場を受け継いでいると言える。

これに対して、パトナム主義者からはすぐに、ブラックバーンの立場が科学により記述されるべき事実の領域と投射主義的に説明されるべき価値の領域という悪しき事実/価値の二分法を前提としているという反論がなされるかもしれない。ブラックバーンは道徳とは我々の反応が投射されたものであると言うが、そうであるとしても、道徳的態度が世界のどのような特徴に反応しているかは価値語を使用せずに特徴付けることはできない<sup>(11)</sup>。非認知的な道徳的態度は世界の中の何に反応しているのかと問われたならば、それは例えば、「善い行為」や「悪い行為」のような道徳的語彙を用いた仕方では説明できないのではないだろうか。価値と事実はもたれあっているのであって、価値判断から独立に我々の反応を自然主義的に特徴付けることなどできないとそのようなパトナム主義者は論じるかもしれない。

これに対して、ブラックバーンは態度およびその改良が実践内在的に価値語を用いて説明されることを投射主義者は認めることができると論じる (Blackburn (1981): 166-168)。道徳的実践の外側にあり、価値語を習得していない人は、どのような世界の特徴が、我々の反応の投射によりまとめられるのかわからない。言い換えると、我々の感受性を共有しておらず、また

その感受性を理解してもいない人は、我々の「善い」という語の使用をいくら観察したとしても、次にどのような状況に対してその語を適用すべきかということを理解することができない。だが、ブラックバーンによると、そのことは投射主義者にとって問題とはならない。投射主義者は道徳的な実践を反応へと還元し、消去するということにコミットしてはいないのである。道徳的实践はいわば「ノイラートの船」であり、実践内在的に理解され、評価されねばならないのである (Blackburn (1981): 176)。

すると、ではブラックバーンはなぜ反实在論者であるのかと疑問に思われるかもしれない。ブラックバーンは道徳的事実、真理、推論、理由付け、等々を認める。そしてまた、道徳が実践内在的にしか理解されえないということも認め、道徳的实践が態度へと還元され消去されるとは考えていない。では、どのような点でブラックバーンは道徳についての实在論者と対立しているのだろうか？

ブラックバーンの答えは、我々は結局のところ動物であり、道徳的事実についてはこの事実を成立させる我々の反応の傾向性が獲得される仕方、この実践の外側から自然主義的に説明することができるのに対して、グローバルな自然科学の事実に関してはそのような説明を与えられないというものである。ブラックバーンによると、我々の道徳的コミットメントの存在については進化論的な説明を道徳的实践の外側から与えることができる (Blackburn (1988): 168-169)。すなわち、協調的で利他的な行為を行う動物は生存に有利であり、そのような反応をする傾向性が自然淘汰の圧力に対して有利に働いてきたと考えることができるというのである。

これに対して、一般的な科学的事実についてはそれを成立させる背景条件を与える試みは自然的ではなく、哲学的で思弁的なものになってしまうとブラックバーンは考える。ブラックバーンはそのような思弁的な試みを「超越論的」と呼び、不毛な試みであるとする。

私が「対応条件」と呼ぶところの観点から問題を設定すると超越論的側面を見て取ることができる。我々が感覚的器官と認知的器官を適切に用い、 $p$  と信じるに至ったならば、 $p$  であると我々は信じたい。どのような種類の理論がこのような確信を持つ権利を説明するのだろうか？も

し  $p$  が基礎物理学の理論のテーゼであつたら、その理論自身のみが説明する。これこれの情報をこれこれの仕方で使用し、ニュートリノが存在すると我々が信じるならば、おそらくニュートリノは存在するのはなぜかを理解するとは、単にニュートリノ理論がどのような証拠を持つのかを理解することである。これは物理学である。理論の外側から、背景、対応条件の支持を得ようとするあらゆる試みがいんちきであることは確実である (Blackburn (1988): 167)。

理論が「我々に依存している」と言うことが有意味である唯一のあり方は、その理論に関わる実践の成立について発生論的な科学的説明を与えることができるという仕方であり、哲学的な実在論と反実在論との論争というものは理解可能ではない。こう考えたとき、ブラックバーンによると、一般的な科学理論に対して背景を与える試みは不毛なものとなってしまうのに対し、道徳理論に対しては自然科学的にこの理論を成立させる実践の発生論的説明を与えることができるのであり、この点において道徳的实践は反実在論的な仕方理解されると考えられるのである (Blackburn (1988): 169)。

ここまで来ると、ブラックバーンとパトナムの対立点が明らかになる。注意すべきは、ブラックバーンは自然科学については実在論を採り、道徳については反実在論を採るという区別をしているのではないということである。もしそうならば、彼の立場はパトナムの事実/価値二分法の拒否とストレートに対立するだろう。ブラックバーンは自然科学一般については、クワイン流のラディカルな自然主義を採っているのである。

自分を実在論者と呼ぶ哲学者が存在し、また自分を反実在論者と呼ぶ哲学者が存在する。だが、私が思うにこの論争全体に背を向けようとする哲学者はどんどん増えてきている。そのような哲学者の中には自然主義者が含まれている。彼らは、人間の自然科学以外には何も存在しないと我々に言う。ここから、(例えば)物理学の背後に存在する「第一哲学」や、哲学者に世界のどれほどが「我々の構築物」であるのかとか(反実在論)、反対に「我々から独立」なのかとか(実在論)を教える人間学は存在しないということが帰結する。(Blackburn (1988): 166)

このようにブラックバーンは、自然科学以外による記述をなんであれ認めず、問題となっている領域の事実に対して、それが我々から独立なのかどうかを論じる実在論と反実在論の論争を不毛であるとして退ける立場として自然主義を説明する。そして、その上で彼は、一般的な自然科学全体に対しては自然主義が正しいと考える。すなわち、先の引用にもあったように、物理学のような基礎的な自然科学についてはそれが我々から独立かどうかというようなことを論じる視点は存在せず、ただ物理学に内在的な仕方では物理学の記述を受け入れるしかない。だが、道徳のような分野についてはその領域の発生論的説明を自然科学により与えることで、それが我々の反応に依存しているということを示すことができ、従って、道徳について反実在論を唱えることに意味を与えることができるとブラックバーンは考えているのである。彼によると、「我々の科学の成功や世界の本性的なようなグローバルな問題を考えるときには、自然主義が勝つであろうと思われる。しかし、ローカルな領域では戦いを行うことができるとと思われる (Blackburn (1988): 167) 」のである。

これに対して、パトナムにとって、「認識論的に正当化されている」のような認識論的規範について議論されるようなことは残っておらず、これらはいわば消去されると考えることは受け入れられない。我々は理論の正当化が、従って真理がどのような仕方では我々と関わっているかを理解せねばならない。

「規範の消去は精神的自殺の企てである (Putnam (1983) b: 246) 。」認識論的規範がどのようなものであるかを理解することは重要な哲学的課題であり、単に科学だけによって答えが出されるようなものではない。これは、もちろん、何が正当化されているかを科学の外側から基礎付けるという「第一哲学」に戻ることはない。そうではなく、我々がどのような認識論的位置に置かれているのかを適切に理解することが重要なのである。

ブラックバーンの言うところの「対応条件」について考えてみよう。我々が適切な証拠を持ち、「ニュートリノが存在する」という信念を持つに至ったなら、なぜ実際にニュートリノが存在することは真であると考えられるのだろうか？ブラックバーンはこれは物理学の問題であり、物理学的証拠を集めることで答えることに尽きるとする。これに対し、パトナムはそうに

科学が科学で完結しているとして済ますことはできないとする。物理学の証拠とは何であろうか？一つは一連の実験データであろう。だが、このデータはまた背景となる理論に依存している。そして、重要なのはこのデータと理論をどのように解釈すべきかは物理学自体が教えてくれることではないということである。データと理論さえあればそこから何を引き出すべきかは、アルゴリズム的に決まると考えることはまさにカルナップの立場へと回帰することである。先に見たように、パトナムは証拠から何を引き出すべきかは科学者の単純性、包括性、等々の価値判断に依存しているとしていた。すなわち、パトナムによると、どのような証拠があれば、どのような帰結を引き出してよいのかという認識論的規範は物理学自体の中に書き込まれてはおらず、まさに「我々に依存している」ものとして理解されねばならないのである。

さて、では結局のところパトナムはメタ倫理上でどのような立場を占めるのだろうか？先に見たように、パトナムが道徳について何らかの実在論を採っているのは確かである。パトナムにとって、道徳的事実は科学的事実と、まったく同じ種類ではないとしても立派な事実として存在する<sup>(12)</sup>。だが、パトナムの立場はムーアの道徳的実在論とは異なる。我々の合理的判断から独立で、それ自体独特の仕方 で成立している価値の世界があり、我々はこれを直観することができると考える立場は、形而上学的実在論に非科学的な色彩を加えたものでしかないだろう<sup>(13)</sup>。パトナムの立場は実在論ではあっても、内在的実在論であって形而上学的実在論ではないのである。

この点で、パトナムの立場は現代のメタ倫理学者の中ではジョン・マクダウェルの立場に最も近いように思われる。マクダウェルもパトナム同様に事実と価値の領域を峻別することはできないと考える<sup>(14)</sup>。マクダウェルによると、道徳的事実は、彼が理由の空間と呼ぶ、行為に理由を与えるという実践の網の目の中で事実として成立する。そして、この点に関しては科学的事実も同様である。我々の実践や行為と独立に事実が存在するのではなく、逆に実践の中で行為の理由として扱われ、認められるものが事実なのであり、科学的事実もそれがまさに理由として我々に受け入れられることにより事実としての身分を獲得していると考えられる。我々の判断や正当化と事実が密接に結びついていると考える点で、マクダウェルも内在的実在論者であると言えることができるだろう。



マクダウェルとパトナムは非常に近い立場にあるが、それぞれが自身の立場を定式化する議論やコンテキストは非常に異なる。マクダウェルは自身の立場を主張するに際しては、受動的経験と自発的概念の間の緊張関係という認識論的な問題領域を念頭に置いている。彼によると、概念的な汚染を免れた裸の経験などというものを考えることはできず、また経験的入力役割りをおそらく単なる知識の整合説に陥ることも避けねばならない。そのためには、経験が概念的なものとして理由の空間の中に位置付けられねばならないということを理解する必要がある。我々はこの理由の空間の外側に立って経験と理論を比べることはできない。そして、このことを理解したならば科学における観察と類比的に道徳的な知覚についても、それが概念的なものとして理解されている限り、問題なく語ることができるのである。このマクダウェルの議論に対してパトナムが反対するようなことはほとんど何もないと思われるが、問題はこの概念的自発性、理由付けとして理由の空間、言い換えれば我々の合理性というものがどのような内実を持っているのかについてマクダウェルの議論は比喩の域を超えないように思われるということである。「理由付け」と言われるが、そこにはもっともな理由とそうでない理由があるはずであり、ある判断がもっともな理由を持つ、すなわち合理的であるとはどういうことなのかということがマクダウェルの立場ではただ仮定されているだけでしかないように思われるのである<sup>(15)</sup>。これに対して、先に見たようにパトナムは自身の立場を、我々の合理性とは何か、特に科学的合理性、客観性、真理、等々の観念はどのように連関しているのかということを明らかにする試みというコンテキストの中で形成してきた。パトナムにとって我々の合理的判断能力は、単に比喩的なものでも、また仮定されるものでもなく、カルナップによる科学的合理性の形式化という試みの失敗と密接に結びつく仕方であって要請されてきたものである。そのため、パトナムは決して非科学的でオカルト的な能力を仮定しているのではない。逆に科学が成立しているということを受け入れるならば、我々が合理的判断能力を持っていると考えねばならない、あるいは我々の認知的能力をそのようなものとして理解せねばならないとパトナムは論じているのである。このとき、パトナムは哲学者があらゆる実践に先立って理性や知的直観により、それらの実践の客観性を保証できるとしているのではない。「第一哲学」による「科学の基礎付け」

はパトナムの課題ではないのである。

バーナード・ウィリアムズはかつて、道徳哲学を誰かに向けて語るとしても、その人が話を聞いてくれなければ意味がないと述べた。「[非道徳主義者たち] がドアを突き破り、メガネをたたきわり、大学教授を連れ去るとき、その大学教授が行う道徳の正当化は何の役に立つだろうか? (Williams (1985): 23) 」つまり、すでに道徳的实践にある程度参入しており、理性的共同体に属す人に対してのみ道徳哲学を語ることができるのであり、これに属さない人に対しては哲学者は無力である。

これは逆に言うと、すでに道徳的实践に参入しており、また科学的な世界観を一定程度は受け入れている人に対して、科学や道徳というものが我々のあり方とどのように関係しているのかを示すことには、哲学者が寄与できるということでもある。すなわち、理性的である我々が自分たちの実践の中で重要な位置を占めている道徳や科学について反省的に理解を深めることは、新しい道徳的事実や科学的事実の提示ではないとしても、十分意義深いことだとパトナムは考えているのである。いわばパトナムの哲学が目指すものは「大人の教育」<sup>(16)</sup>であって、これは科学的実践や道徳的实践を完全に中立的な地点から基礎付けようとする「第一哲学」の復権とは一線を画すと考えられるのである。

## 注

<sup>(1)</sup> 1990 年代初頭以降、パトナムは自身の立場をマイナーチェンジし「自然な実在論」呼んでいるが、本稿の課題にとってこの変更は重要ではない。従って、本稿では「内在的実在論」を 1970 年代末以降、今日までのパトナムの立場の呼称とする。

<sup>(2)</sup> Moore (1903): 113-114 を見よ。

<sup>(3)</sup> Ricketts (1982) を参照せよ。

<sup>(4)</sup> Quine (1951)

<sup>(5)</sup> Putnam (1963) を見よ。

<sup>(6)</sup> Putnam (1983) a: 208を見よ。

<sup>(7)</sup> 有名なのはいわゆるモデル論的議論である。他にもウィトゲンシュタインの私的

## メタ倫理におけるパトナムの立場(大谷)

言語論から同様の帰結を引き出している。

- (8) Putnam (2002) : 108-109 を見よ。
- (9) 道徳的判断に関わる心的状態が認知的な状態ではないと考える立場は非認知主義と呼ばれ、道徳的事実や真理が真正の事実や真理として存在することを否定する反実在論とは通常区別される。ブラックバーンの立場は非認知主義かつ反実在論なので、ここでは厳密な区別を問題にしはしない。
- (10) この点については、Blackburn (1981) : 177-179 を見よ。
- (11) これはマクダウェルの議論である。McDowell (1981) を見よ。
- (12) パトナムは我々が道徳的事実を知覚するというところをも認める (Putnam (2002) : 102-103, 109-110)。ただし、パトナムは知覚を概念的であり、また批判にさらされる可謬的なものとして考えているということに注意せよ。
- (13) また、本稿では扱わないが、近年盛んな自然主義的実在論とも異なる。
- (14) 例えば、McDowell (1981) を見よ。また、彼の哲学の基本的な構想は McDowell (1996) を見よ。
- (15) 「理由の空間」に対するこのような批判としては、大谷(2006)を見よ。
- (16) 「大人の教育」はスタンリー・キャベルのフレーズである。パトナムの哲学をこの観点から見ることについては Conant (1990) による。

## 参考文献

- Blackburn, Simon (1981) "Reply: rule-following and moral realism", in Holtzman & Leich (1981): 163-187.
- (1988) "How to be an ethical anti-realist ?", *Midwest Studies*, Vol. 12, reprinted in his *Essays in Quasi-Realism*, Oxford: Oxford University Press, 1993: 166-181.
- Carnap, Rudolf (1950) "Empiricism, semantics, and ontology", *Revue Internationale de Philosophie*, Vol. 4, reprinted in his *Meaning and Necessity*, second edition, Chicago: The University of Chicago Press, 1956: 205-221.
- (1963) "Intellectual autobiography", in *The Philosophy of Rudolf Carnap*, P. A. Schlipp (ed.), La Salle, The Open Court: 3-84.
- Conant, James (1990) "Introduction", in Putnam (1990) b: xv - lxxiv.
- Holtzman, Steven & Leich, Christopher (ed.) (1981) *Wittgenstein: To Follow a Rule*,

## メタ倫理におけるパトナムの立場(大谷)

- London: Routledge and Kegan Paul.
- McDowell, John (1981) “Non-cognitivism and rule-following”, in Holtzman & Leich (1981): 141-162.
- (1996) *Mind and World: With a New Introduction*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Moore, G.E. (1903) *Principia Ethica*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 大谷 弘 (2006) 「ウィトゲンシュタインとウィトゲンシュタイン的文脈主義」、『論集』、Vol. 24、東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室：271-284.
- Putnam, Hilary (1963) “‘Degree of confirmation’ and inductive logic” in *The Philosophy of Rudolf Carnap*, P.A.Schlipp (ed.) , La Salle, The Open Court, reprinted in his *Mathematics, Matter and Method*, second edition, Cambridge: Cambridge University Press, 1979: 270-292.
- (1981) *Reason, Truth and History*, Cambridge: Cambridge University Press.
- (1982) “Beyond the fact/value dichotomy”, *Critica*, Vol.14, reprinted in Putnam (1990) b: 135-141.
- (1983) a “Why there isn’t a ready-made world?” in Putnam (1983) c: 205-228.
- (1983) b “Why reason can’t be naturalized?” in Putnam (1983) c: 229-247.
- (1983) c *Realism and Reason*, Cambridge: Cambridge University Press.
- (1990) a “A defence of internal realism”, in Putnam (1990)b: 30-42.
- (1990) b *Realism with a Human Face*, James Conant (ed.), Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- (2002) “Are values made or discovered ? ”, in his *The Collapse of Fact/Value Dichotomy and other essays*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press: 96-110.
- Quine, W.V.O. (1951) “Two dogmas of empiricism”, *The Philosophical Review*, Vol. 60, reprinted in his *From a Logical Point of View*, second edition, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1980: 20-46.
- Ricketts, Thomas (1982) “Rationality, translation, and epistemology naturalized”, *The Journal of Philosophy*, Vol. 79: 117-136.
- Williams, Bernard (1985) *Ethics and the Limits of Philosophy*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.